

平成30年度（第40回）

# 少年の主張 石川県大会

発表記録集

伝えよう！21世紀を生きる君たちの熱いメッセージを



と き ■ 平成30年9月1日(土)

ところ ■ 石川県青少年総合研修センター

石川県 石川県教育委員会 石川県健康運動推進本部  
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

## はじめに

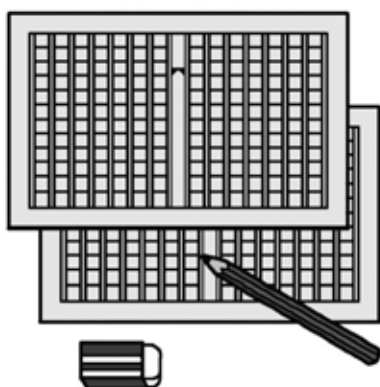
昭和五十四年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々に支えられ、今年で四十回目を迎えることができました。

この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

本大会は、加賀地区、石川中央地区、金沢市地区、能登地区の四地区から選ばれた十六名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、聴衆に大きな感動を与えました。

この記録集は、その十六名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろのようによく考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の子ども・若者活動推進の一助としてご活用いただければ幸いです。終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様にご厚くお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



もくじ

◎はじめに

◎大会発表作品

最優秀賞

Do anything as you can!

金沢大学附属中学校 三年 杉原史緒梨……………3

優秀賞

今しか聴けない話

加賀市立山中中学校 二年 新家 彩桃……………4

いただきますの意味

七尾市立七尾東部中学校 三年 生長 陽仁……………5

奨励賞

私を変えてくれた言葉

白山市立北辰中学校 三年 永山 彩月……………6

人はなぜ勉強するのか

白山市立松任中学校 三年 山本 葵……………7

徳を積む

金沢市立鳴和中学校 三年 坂野 里紗……………8

真の関わり方とは

能美市立辰口中学校 三年 森 成亜……………9

一人で戦う強さ

かほく市立河北台中学校 三年 坂部 時悠……………10

壁

七尾市立七尾中学校 三年 釜野 楓佳……………11

神様からのプレゼント

野々市市立布水中学校 三年 間口桜之介……………12

私たちの柴山潟

加賀市立片山津中学校 三年 矢鋪莉音瑚……………13

お母さん、ありがとう

小松市立南部中学校 三年 角 桃華……………14

家族

七尾市立七尾中学校 三年 宮本 千冬……………15

私は幸せ者

金沢市立兼六中学校 三年 山本 花実……………16

美を知り学ぶ

七尾市立七尾東部中学校 二年 黒丸 文月……………17

小さな言葉の大きな力

石川県立金沢錦丘中学校 三年 黒田 咲陽……………18

(優秀賞、奨励賞は発表順に掲載)

◎審査委員講評……………19

石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事 嶋 耕二

◎少年の主張石川県大会概要……………20

◎石川県大会審査基準……………21

◎地区大会概要……………22

◎第40回少年の主張全国大会

〈わたしの主張2018〉 内閣総理大臣賞受賞作品……………26

最優秀賞 “Do anything as you can!”

金沢大学附属中学校 三年 杉原 史緒梨



“Do anything as you can!” 私にこの言葉をくれたのは、アメリカに住む親友です。彼女との出会いは、一昨年の夏、アメリカへ一ヶ月ホームステイに行ったときでした。私の母は自宅で英会話を教えており、物心ついたころから英語での会話は常に身近にありました。そのため、ホームステイにも不安は全くなく、アメリカに向かう飛行機の中ではこれから始まる生活への期待に胸を膨らませていました。

しかし、ホストファミリーの家に到着し、いざ会話しようとする、日本であれだけ自然に話せていた英語が全く出てきません。最初は笑顔で話しかけてくれていたホストファミリーたちも、一言も話さない私に困った様子で「今日は疲れているだろうから早く休みなさい。」と言ってそれ以上は話しかけませんでした。

やがて夜になり、私はいったい何のためにここにいるんだろうと思いました。悲しくて、自分が情けなくて涙があふれました。そんなとき、その家の娘さんと私と同年のブレアリンがやってきて、

“Do anything as you can!”

「あなたができることをすればいいよ」と声をかけてくれたのです。

その言葉に勇気づけられた私は、お土産に持ってきた浴衣をトランクから取り出して彼女に渡しました。

“Are you interested in yukata?”

“Yes! Wow, it's very beautiful!”

こんな簡単なやりとりが、私とブレアリンの初めての会話です。この会話を機に、翌日からは誰とでも積極的に話せるようになりました。表現に迷ったときも、とにかく知っている表現を使い、身振り手振りを交え、特にブレアリンとは何でも話せる親友になりました。

この夏の経験は、私を大きく変えました。心で思っているだけではいけない、行動を起こさなければ。それまでの私は、大好きな英語を活かして世界の人々の役に立ちたいと考えながらも、実際に行動を起こすことはありませんでした。

“Do anything as I can!”

今の私にもできることが必ずあるはず。そうして探してみると、金沢市では災害時語学サポーターを募集していることが分かりました。災害時に避難所で、日本語の分からない外国人に声をかけ、必要な情報や物資を提供する役割です。私はいま、そのサポーターとして登録し、仲間たちとともに万が一に備えた訓練に参加しています。そして、外国の方にも分かりやすい掲示物の表記方法や、習慣の違いで起きるかもしれないトラブルを未然に防ぐ方法などを常に話し合っています。その訓練のおかげか、町中で困っている外国人観光客に対してもより適切なフォローができるようになりました。

ですが、これで十分などとは考えていません。世界に目を向ければ、私にできることはまだまだあるはず。世界には、貧困に苦しむ人々や、戦争により国を追われ難民となった人々など、助けを必要としている人はたくさんいます。問題があまりに大きく、そして遠い国での出来事のため、自分に出来ることなどないのではないか、ついそう思ってしまうこともあります。でも、そんなとき、ブレアリンのあの言葉が聴こえます。

“Do anything as we can!”

ニュースを見て心を痛めているだけでは何も変わりません。どんなに小さくとも、自分にできる何かを行動にうつすこと。あの日、浴衣を差し出したことで、私とブレアリンの間には国境を越えた強い絆が生まれまし。なんでもいい、まず一步を踏み出しましょう。そうすれば、いつか必ず言葉も宗教も国境もすべてを越えることができます。大丈夫、私たちはきっと世界を変えられます。







「戦争なんて、もう二度としちゃいかん。」繰り返しそう言った、大おばあちゃんと呼んでいる曾祖母の熱い目、強い口調を、私は忘れることができせん。と同時に、強く思いました。「この声を、この思いを一人でも多くの人に届けたい。」と。

戦争の被害に実際に遭われた方の肉声を、身振り手振りを交えながら目の前で聴く、いわゆる「魂の叫び」は、テレビや本等で見たり聞いたりする「お話」とは、感情の伝わり方が全く違います。だから、直接話を聴いた方がいいことは誰でも分かるのですが、そういう機会を多く持つ人が、私には少ないように思えます。「いつでも聴ける」と思っているのでしょうか。「いつまでも聴ける」と思っているのでしょうか。

私の曾祖母は、現在九十歳を超えています。足が悪いため、今は老人介護施設で暮らしていますが、よく食べ、よくしゃべる、元気で楽しい人です。その日も私は曾祖母に会いに行き、とりとめのない話に花を咲かせていました。そして、話の流れで何とはなしに「戦争してた頃って、大おばあちゃん二十歳くらいだよ。戦争ってどんなの?」と聞いてみました。すると、いつも楽しそうで、おしゃべり好きの曾祖母の表情が明らかに曇り、黙り込んでしまいました。空気が一瞬にして変わりました。

当時、病院への食糧を調達し、それを担いで運ぶという仕事をしていたのですが、約五キロもの道のりを、お米一俵分の食糧をたったの三人で担いで運ぶことは、栄養状態が良い今でも、大変な重労働だったことが分かります。でも曾祖母は、「運んだ後に食べ物がもらえたから、頑張れたんだよ。」と笑って言っていました。戦争中は、食べ物をもらえることだけを心の糧に、たとえ女性でも重労働を強いられる、苦しい世の中だったのです。それに比べ今は、ある程度の労働で、相応の報酬をもらい、それによって食べ物を得ることができま

祖母の声は穏やかで、笑顔だったので、「当時は、それはそれで幸せだったんだろうな。」と感じました。そして最後に、「戦争はない方がいい?」と聞きました。するとまた、声や表情は一変し、「戦争なんて、もう二度としちゃいかん。」

と言いました。低い声でしたが、でもお腹に響く声でした。

あの時感じた気持ち、今も忘れることはありません。その時の表情や口調、張り詰めた空気は、戦争中の緊迫感や怖さ、生活苦を物語っていたからです。でもそれは、直接話を聴いた、私だけが感じることでできた、心の震えです。戦争を実際に体験した人の「魂の叫び」を直接聴くことができたからなのです。

戦争が終わって七十年余り、日本には平和が続いています。そのかわりに、高齢化が問題視されています。しかしこれは、直接「魂の叫び」を聴ける機会が、まだたくさんあるということでもあります。時代が進むにつれて、確実に減っていくこの機会を大いにいかし、二度と目覚めさせてはいけない、戦争という怪物の恐ろしさを、人から人へ、直接の声で伝えていくことが必要だと思います。本やテレビ、ビデオ等では伝わらない皆さんの思いを、直接伝えあっていけば、さらに長く平和が続くのではないのでしょうか。

来年、私は修学旅行で広島に行きます。そこで、原爆の被害に直接遭われた方から、その体験談をお聴きします。その方たちは、できれば思い出したくない辛いお話を、平和の大切さを訴えるために、敢えて話してください。と聞いています。私は、被害に遭われた方から直接話を聴ける最後の世代の責任を果たすために、「いつでも、いつまでも聴くことができない」その貴重なお話を、しっかりと、目と心で聴いてこうと思っています。





僕の知り合いに究極のベジタリアンがいます。彼女は大人になって、突然あらゆる食材を受けつけなくなりました。食べられるのは野菜のみ、卵も乳製品もだめです。スープのだしも動物性のは口にできません。少しでも食べれば、アナフィラキシーショックが起こり、命の危険にさらされます。本来楽しいはずの食事が、一つ間違えば大変な事故につながるということを知りました。

これをきっかけに、いかに自分が食べることに無頓着で毎日食べられることを当たり前だと思っていたのか、ということに気づき、僕たちはどのくらいの意識を持って「食」と関わりあっているのかという疑問を持つようになりました。そんな中、僕は学校給食の状況が気になり、調べてみました。中でも気になったのは食べ残しです。学校では定期的に残量調査を行っていますが、調査期間中のみ残量は少なく、それ以外の日はメニューによって残量が三倍に増えていました。野菜を使ったメニューなどは提供される量の十五パーセントが食べ残しとなる日もあったのです。驚きました。もちろんアレルギーや体質により特定の食べ物を口にできない人もいます。しかし食べ残しの主な要因はただの好き嫌い。更には食に対する感謝の気持ちの不足です。僕たちが給食を食べるまでにどれだけの人が苦労をしているのか、生産者の方、調理員の方を思い、肉や野菜の命をいただいていることを考えれば、給食を残すという行動には至らないはず。またこのような感謝の不足はマナーにも反映されています。食器を投げるように片付ける人。はしの片付けも向きがバラバラ。牛乳のフタもあちこち無造作に捨てられる。これらの行為は食に対する感謝の気持ちや意識の低さ故に起こることだと考えます。これと同じようなことが学校にとどまらず日本全体で起こっています。たとえばコンビニで販売される弁当は時間がくれば廃棄。農作物は傷がついたもの、形がいびつなものは商品にならない。食べ物を惜し気なく捨てる現状は、日本の贅沢社会と飽食文化をますます助長しています。

僕たちはそんな状況の中でどうあるべきなのでしょう。まず大切

なことは、目の前の食べ物が決して当たり前ではないと感じることです。苦労を重ね、農作物を育てて下さる生産者の方々、食べたくても食べられない人の辛さや、栄養を考え料理してくれる母を思い浮かべる時、形だけの「いただきます」で済ましてはいけないと思うのです。「いただきます」は食に対する様々な感謝を込め、発せられるべき言葉。つまり、僕にとって「いただきます」の意味とは、本来の命をいただくという意味のみならず、自分が今まさに口にしようとしている目の前の食べ物のありがたみと重みを感じるという意味でもありません。この意味を食事の度にかみしめた上で、「いただきます」を言うならば、食べられることへの感謝の念がおのずとわき上がってくるはず。たったそれだけで、給食の残量やマナーの問題、ひいては日本で起きている様々な食の問題についても解決の糸口が見出せるのではないのでしょうか。まずは今日の晩ごはんから、「いただきます」に感謝を込めて。

皆さんと共に「合掌」。

いただきます。そしてごちそうさまでした。





皆さんは、誰かの言葉に救われたり、考え方に心を動かされたことはありますか。芸能人やスポーツ選手、学者などをあげる人がいるかもしれません。

では、友達はどうですか。私が友達をあげた理由は、今までの中学校生活の中にあります。

私は、中学一年生のとき、小学校から大きく変わった環境についていけず、それがストレスになっていました。特に、勉強量が多くなったことで勉強についていけないのか不安とあせりを感じていました。そのせいで周りの楽しいことが見えなくなつて、自分で自分を追い詰めていました。朝起きると、学校に行きたくない。という感情でいっぱいになり、毎日が本当につらかったです。そのときは、先生や母が支えてくれたおかげでなんとか乗り越えることができましたが、二年生になつてからは、「また一年生のときのようになつたらどうしよう。」と心配になり、不安がふくれあがつてしまうことがよくありました。

そんなあるとき、友達に一年生のときのことを話すことがありました。話し始めると、どんどん暗い雰囲気になつていき、話してしまつたことを後悔しましたが、友達は私の話を真剣に聞いてくれました。話をしていくうちに、その友達にも大変なときがあつたけれどがんばっていること、前向きな気持ちになれるよう心がけていることを教えてくれました。

「苦しいのはさっちゃんだけじゃないよ。」

「過去のつらさより今を楽しもう！」

「一緒に支え合つてがんばろうね。」

優しい言葉もたくさんかけてくれました。普段から明るく優しいその友達は、前向きにがんばれる人なんだと思いました。常に明るく前向きに、そんな考え方はネガティブになりがちな私にとって今でも支えになつています。

また、他の友達からは勉強の面で大切なことを教えてもらいました。それは、勉強した結果も、しなかつた結果も、自分に返つてくるということ。ある時、「勉強なんてしたくない。」と言つた私にクラスの友達が、

「勉強するかしないかは自由やけど、点数悪くて悔しい思いするのは自分やよ。」

と言つたのです。その友達は、結果は全部自分に返つてくる、という

ことをちゃんと理解して努力しているのに対し、私はそのことから逃げていたのではないかと、とハッとさせられました。勉強はめんどくさいし大変、やりたくない、ずっとそう考えてばかりでしたが、そればかり考えていても何にもならない。決して簡単なことではないけれど、めんどくさいと思うことにもちゃんと向き合つて、いやなことからはもう逃げないと決めました。

このように、私は辛いとき、逃げ出しそうなときに、友達の言葉によつて救われ、新たな一歩を踏み出すことができました。もし私の周りにこんな友達がいなかったら、私は本当に学校や勉強のことが嫌になり、逃げてしまつていたかもしれません。

以前の学校だよりに、ビートたけしさんのこんな言葉が載っていました。

「困つたとき、助けてくれたり

自分のことのように心配して

相談に乗つてくれる

そんな友人が欲しい

馬鹿野郎

友達が欲しかったら

困つたとき助けてやり

相談に乗る

心配してやることだ

そして相手には何も期待しないこと

これが友達を作る秘訣だ」

私の相談に乗つてくれ、何の見返りも求めずに心からの言葉を贈つてくれた友達。そのことが本当に支えになり、私を救つてくれました。次は、私が誰かを支えてあげる番だと思つています。かつての私のように、つらくなつたり、逃げ出したくなつたりしている友達がいたら、私に言葉をかけて支えになってくれたあの友達のように、私も誰かの支えになれるような人になりたいです。







みなさんは自分の将来について真剣に考えたことがありますか。先日、第一回目の進路希望調査があり私は進路について初めて真剣に考えました。志望校を決めることは将来の自分にとってとても重要なことです。高校受験を前にして私は勉強することの意味について今一度よく考えてみたいと思いました。

みなさんは何のために勉強していますか。「先生や親に勉強しなさいと言われたから」とか「提出課題があるから」という理由で仕方なく勉強している人もいないのでしょうか。しかし、このような気持ちで勉強しても全然楽しくないし、やる気も出ません。

そんな時ふと「勉強することは自分を成長させる」と母が言っていたことを思い出しました。その時の私はこの言葉の意味があまりよく理解できませんでした。

正直なところ私にも苦手の教科があります。難しい問題にぶつかるとも多いです。しかしそんな時、もう一度頑張ろうという前向きな気持ちで困難に立ち向かうことが自分の成長につながっているように感じます。さらに、努力することの大切さを知り、忍耐力が身に付くとも思うのです。そして、この時身に付いたことは将来の自分にも生かされていくのだらうと思うようになりました。

そうは言っても自分から進んで勉強することは難しいことです。では、勉強はつまらないことばかりでしょうか。新しいことを知ることが嬉しさや楽しさがあります。新しい発見でワクワクしたり、もっと知りたいという気持ちが強くなったりします。私にも大河ドラマ「真田丸」を見てもっと詳しく知りたいと歴史に興味をもち、実際に大阪城に足を運んだ経験があります。興味や好奇心が刺激されることでこの世界の新たな側面を発見することができるのです。

このように少し視点を変えると勉強はプラスの面をたくさんもっていることが分かります。学ぶ中でいろいろなことに興味をもち、深い知識を身に付けることで将来の夢や目標につながるものを見つけることができるとは思いません。たとえ今は夢や目標を持つことができな

くても将来の自分のために選択の幅を広げることができると思うのです。選択の余地がないよりも多くの選択肢の中から自分の手で選ぶことができる方がはるかに良いはずですよ。

昨年、私は「マララ」という本を読みました。マララ、ユスフザイさんという十代の少女が命の危険にさらされながらも学校に行く権利を訴えていくという事実を基にした本です。この本を読んで世の中には様々な理由——貧困や紛争、過激な思想によって学校に行きたくても行くことのできない子どもが大勢いることを知りました。ごく普通のことだと思っていたことが普通ではないのです。私は自分がいかに恵まれた環境にあるのかを思い知らされました。そして普通に勉強できることが自分の将来の選択肢を広げることになると気がつきました。「勉強なんて意味がない」と勉強することをやめてしまうことは自分の将来の可能性を自分の手でなくしてしまうことと同じではないでしょうか。私は改めて普通に勉強できることに心から感謝し、この恵まれた環境を最大限に生かす努力をしたいと思いました。

今年七十歳になる祖父が「この歳になっても学ぶことはたくさんある。日々勉強だ。」と話していたことがあります。この言葉は今の私の心に強く響きました。学校で学ぶことだけが勉強ではなく、学びたいと思うことが勉強なのだと思います。だから、受験が終われば勉強も終わるわけではないのです。人はなぜ勉強するのか。長い人生の中で自分をより高めたいと思うことこそが本当の理由ではないでしょうか。私は中学三年の今だけでなく、今後の人生においても勉強することの意味について自分自身に問い続け、何歳になっても勉強し、成長していきたいです。







今年の六月下旬、大阪北部で大きな地震があったことをみなさんは覚えているでしょうか。私の祖父母は北部にある箕面市に住んでおり、その時大きな揺れを感じたと私は下校してから聞きました。二人は無事であったことに安心した反面、まだ余震が続くのではないかと思うと私は気がきではありませんでした。そんな私に、「おじいちゃんとおばあちゃんは徳を積んでいるから大丈夫よ。」と言ったのは母でした。「徳を積む」とは何なのでしょうか。

「徳」とは「心が正しくて、おこないが人の道にあること」を言います。それを積み重ねることは容易なことではありません。日々の生活の中でどのように積み重ねていけばよいのでしょうか。

私は自分の生活を振り返ってみました。私のモットーは「気付いたら動く」です。例えば学校内ではがれて貼られている貼示物を見つけたら貼り直す。ロッカーから出てしまったクラスメイトのスクールバックを入れ直す。こういった行動をとると清々しい気持ちになります。「えらいね、さすが生徒会やね。」と周りに言われることがあります。ほめられることは素直に嬉しい。しかし一方で「私は生徒会執行部だからやっているんじゃない。」と言いたくなります。私はただ、自分の思うあたり前の行動をやっているだけなのです。「徳を積む」とは自分が正しいと信じている行動を見返りを求めず行い、こつこつと積み重ねることではないでしょうか。私の祖父母はどのような行動をとっていたでしょう。

それは、混雑する駅のホームでのことです。私と祖父母は、早くこの人ごみから抜け出したいという思いでエレベーターを待っていました。私達の後ろにはぐずる赤ちゃんを乗せたベビーカーをおす女性が並んでいました。人ごみの中、ベビーカーが通行人につづらないようにと気を配る彼女。しかしそんな中ついに泣き始めてしまった赤ちゃんを彼女は申し訳なさそうにしていたのです。そんな様子を見兼ねた祖父母は

「お先にどうぞ。」

と彼女に声をかけ、乗れたであろうエレベーターの順番を譲ったのです。女性は何度も感謝の言葉を繰り返して、安堵の表情でホームをあとにしました。

あなたもきつと毎日の生活の中で、自分が正しいと思うことを行動しようとしているはずですよ。以前の私は自分から人に話しかけることが苦手でした。自分が話しかけたら相手はどんな反応するのだろうかという行動する前に先のことをばかり考えていました。友達になるきっかけを逃したこともあります。だから私は小学生の頃、初対面の人が集う他学年同士の会では一人になりがちでした。そんな時のことです。高学年のある一人のお姉さんが、

「一緒に遊ぼう。」

と声をかけてくれました。その光景を私は今でも鮮明に覚えています。だからこそ次は自分が声をかける人になろうと心に決めました。時が経ち、私は高学年になったある日、一人になりがちの子を見かけました。私は過去の自分に背中を押され、その子に声をかけてみました。するとその一言でその子の顔が明るくなったことが私は嬉しかったです。

自分が正しいと思う行動をするにはきっかけが必要であると私は考えます。そのきっかけは人から人へバトンのように続いているのかもしれない。テレビでこんな映像が流れていました。今年七月、中国地方を襲った集中豪雨の被災地に入っている復興ボランティアの光景です。そこで語られていたボランティアの女性の言葉が忘れられません。その女性は阪神淡路大震災で被災したといいます。その時そこで活動していたボランティアから手厚い励ましと善意をうけたそうです。「今回は私が恩返しする時だと思いついて参加を決めた」と話していました。過去に受け取った善意のバトンを女性は受け継ぎ、次につないだのです。

このような善意のバトンは私たちの身のまわりにたくさんあるはずですよ。だからこそ、これから生きる私達はこのバトンをつなぎ社会を築いていかなければなりません。私は誓います。今までやってきた自分の正しいと思う行動をこれからも続けていくと。





ある日、我が家に不幸が訪れました。僕が小学校に入学した年に、祖父の頭に腫瘍ができてしまいました。手術をしましたが失敗し、体の左半分が動かなくなってしまうたのです。こうして、祖父は車椅子での生活を余儀なくされました。まさか自分の身内にと、幼いながらにシヨックを受けたことを覚えています。祖父はこの障がいを持つままでは僕たちと同じように暮らしていました。とても明るくて面白くて優しいおじいちゃんでした。そしてそれは、障がいを持ってからも変わっていないように思えました。僕は、最初に「不幸」と言いましたが、この時点ではこれは決して不幸なことではありませんでした。

しかし、家族全員で買い物に出かけたときのことです。出先でのバリアフリーは整っていました。スロープもあり、車椅子を借りることもできました。はじめは祖父も楽しんでたのですが、徐々に笑顔がなくなり表情が曇ってきたのです。それは、一部の周りの人たちの態度が原因でした。すれ違いざまにこそそこそと話をされたり、くすりと笑われたり……エレベーターに乗ったときには車椅子を見るなり舌打ちをする人もいました。祖父はその後楽しんではいないように見えましたし、家族全員が、もう外出したくないと思わされました。祖父が最も悲しい気持ちだったでしょう。

祖父が受けた扱いは、理屈抜きに絶対にいけないことです。望んで障がいを持つ人などいるはずがなく、祖父を笑った人たちも、もしかすると、今、この次の瞬間に事故に遭ったり病気になるったりして、障がいを持つかもしれません。そうなったときに自分や自分の大切な人が笑われたり邪魔者扱いされたりしたら、と考えたことはあるのでしょうか。

多くの人たちは、障がいを持つ人たちとの本当の関わりを考えていません。僕も、祖父がこうなるまでは、口では「差別はいけない」と言っていますが、それがどういふことなのかを真剣に考えることはありませんでした。最近では、障がい者施設の入所者や終末期患者への暴行や殺害という事件に敏感になりました。加害者は自分の行動を悪事とは捉えておらず、多くの視聴者にとっても「かわいそう」「残念だ」などの感想で過ぎ去ってしまう出来事のようにです。当時、日本どころか世界を震撼させた、あの、相模原障がい者施設殺傷事件。その犯人の手記が出版されたというのを知っている人は、一体どれほどいるのでしょうか。

このようないたましく残酷な事件に触れたとき、多くの人が「障が

いを持っている人をもっと大切にしよう」と思うでしょう。しかし、同時に多くの人がすぐにその思いを忘れさってしまうという、「誰かの大切な人」への認識の軽さを自覚してほしいのです。それに対する戒めと深い反省の繰返しから、障がい者差別はなくなっていくのではないのでしょうか。バリアフリーやユニバーサルデザインの充実とともに、「障がい者の方々に対して、自分は心の根底でどう考え、接しているのか」を問いかけていくことが大切なのです。

たまに「車椅子のおじいちゃん」と暮らしていて大変じゃないの」と聞いてくる人がいます。確かに、健常の人と暮らすよりお金もかかるし介護も必要です。しかし、それを嫌だとは思っていません。祖父は、毎日元気に頑張って生きています。だから、家族みんな自然と、ごく当たり前の日常として介護をしています。祖父がいなくなってしまうたら、家族全員が悲しみに暮れ、特にずっと一緒にいた祖母は元気をなくすでしょう。だから、祖父には一秒でも長く楽しく元気に生きてほしいのです。そして、それは祖父が障がい者だからというわけではなく、大切な人だからなのです。

僕はこれからたくさんの人に出会うでしょう。そのなかには障がいをもつ人もいます。そのとき、障がい者だからといって特殊な態度はとりたくありません。配慮はもちろん必要ですが、できることとできないことがあるのは誰でも同じです。できることは一緒にしたいし、楽しくないというのではないはずで、世界的に考えれば、障がい者差別がなくなり共生の道を拓くことが平和への一歩だとも思えます。

今、僕が「障がい者」という言葉を当たり前のように使っていることも、もしかしら何らかの差別意識につながっているのかもしれない。僕にとつての、そして誰かにとつての大切な人が「障がい者」とは呼ばれないような、認識の壁がなくなつた社会。そのために、心のバリアフリーを大切に、人の心に寄り添つて支えられるようになってほしいです。それが、真の関わり方なのではないでしょうか。





「英雄」はいつの時代もひとりぼっちでした。

今、私達が当たり前に教育されている地動説。コペルニクスに始まりガリレオは、四百年前の当時、まるで気でも触れたかのような扱いを受けながらも「自分の考え」というプライドを守りつづけました。そう、たったひとりだったとしても。

周りに理解者に恵まれず、一人になった自分を想像してみます。会話すらできない環境の中で、意思の疎通もできず自分の存在価値すら疑う日々に、「生きる」希望など持てるでしょうか？

群れなす生き物、例えばイワシは群れる事で、大きく強い敵から逃れる手段をとります。生きるか？死ぬか？命を守る為の行動です。しかし今、真逆の、自己満足の弱者の群れが、ひとりぼっちを作ってしまったっている現実から目をそむけてしまっただけではないでしょうか？

人にはそれぞれ考え、思想があります。同じ仲間は話が合うので、より親密な関係が築かれます。仲良しを作る事は悪い事ではありませんが、その集団が「考えがちがうから」という理由だけで一人に対して冷たい視線を投げかけるのなら、それは既に「攻撃」です。弱いのは一人になってしまった方でしょうか？自分達ばかりを正当化した浅はかな考えを四百年後、笑われる事になるなど、誰が予想できたでしょうか？

そして、それを見ている第三者は？長いものには巻かれる、大勢に加勢して、また群れを大きくして、攻撃するのでしょうか？

「いや？考えてみようか？」  
 たった一人の一言は勇気を伴います。怖いですが、どちらの味方とかではなく、「この争いを何とかしよう！」と、自分の意思で動いた誰かが、時代を変えてきたのではないのでしょうか？戦う相手は自分の弱い心かもしれない。自分の弱い心に立ち向かい、一人で戦えるヒーローの出現こそが、歴史すら覆して来たのです。

キング牧師は言いました。

「本当の罪は、悪人の暴力ではなく、善人の沈黙である」と。

我々、河北台中学校では、この夏「いじめ撲滅宣言」を採択しました。一人一人が高い意識を持ち「それはおかしい」と誤りを阻止しあえる関係を保ちたいです。私自身も、本当の強い人になる為に、自分の中の弱い心と向き合って克服できるように努めたいです。まずは、周りの一人ぼっちの友人に声をかけてみる、そんな勇気から始めます。高い知恵を持つ人間が小さな勇気を重ねていけば、いつの日か、核に頼りおどし合うような戦ですらきえさるでしょう。

「ひとり」の意見を尊重し、「ひとり」で悲しむ人がいない世界をつくること。」

「固定観念にしばられることのない世の中をつくり上げること。」それが、未来を託された私達の最大目標だと思います。あなたも私も、時代を変えるヒーローになれる日があるかもしれません。目標達成のため、

さあ、ここから、はじめましょう。







「練習不足ですね。」

審査員の講評に書かれていたそのたった一文が私の胸を貫きました。あれだけ練習したと思っていた曲が本番になつてうまく弾けない。弾けないというより流れを掴むことができない。上がり症の私には、人前で弾くという緊張が思わぬミスを誘うのです。そのために、今までのコンクールで何度泣いたことか。賞がとれたこともありましたが、それは偶然にすぎませんでした。審査員が求める弾き方ができない。そんな私には、音楽の素質なんてあるのだろうか。

幼い頃から私は楽譜どおりに弾くことだけを考え練習してきました。曲想や表現のことなんてみじんも考えず、ただ間違えないように弾くということばかりが心の中を占めていました。

しかし、演奏会で弾くためのモーツァルトの曲を練習していたときのことです。時折、練習を見ていただいている音楽大学の先生が私にこうおっしゃいました。

「楓佳ちゃんの演奏は何を伝えようとしているのかが分からない。」と。練習不足と言われ、訴えるものがないと言われ、私の頭は混乱しました。私の目の前に壁が立ちはだかったのです。

こんなにも難しいものから逃げたいと思いました。そして、そう思ってしまう自分が嫌いでした。でも、これまで私の生活の一部だった音楽とやっぱり離れられない。様々な心の葛藤がありました。

そんな時、支えてくれたのが私の祖母です。私の練習に、いちいち口を出し私はいつも苛立っていました。

「プロでもないくせに黙っとって！」  
ひどい言葉を祖母にぶつける。そんな毎日でした。それなのに祖母はいつもこう言ってくれました。

「楓佳はもう大丈夫なんだから、音だけにこだわって弾きなさい。」  
そう言われるとなんだか心が軽くなりました。それからの私は、曲の世界を想像し、楽しんで練習するようになりました。

数か月後、次の舞台に立ちました。音だけにこだわり無心で演奏し

ました。演奏後、先生が「これほどまでにシヨパンを弾きこなすとは思っていなかった。」と涙を流して言うてくださいました。その時気付きました。音楽とは誰かを感動させることができる。感動が涙に変わる。そして笑顔にさせることができるんだと。

しかし、人の心の琴線を振るわせるような音を出すことは容易ではありませんでした。自分の心がつぶれそうになるくらい辛い日々がありました。私がそれを克服できたのは、できるようになるまで練習に付き合ってくださいました先生。そして、夜遅くまで音が鳴り響いていたのに「うるさい。」とは言わず応援してくれた家族の支えがあったからです。

「壁を乗り越える」それは「辛いことから逃げず正面から向き合う」ということではないでしょうか。うまく弾けず、指を叩いた日々。支えてくれた人。それが乗り越える時の力となりました。そして嫌だった祖母からのアドバイスも受け入れたことが今に繋がったのだと思います。これからも様々な試練があります。しかし私はそんな壁を乗り越えていきます。



## 奨励賞 神様からのプレゼント

野々市市立布水中学校 三年 間口 桜之介



「なぜ人の命を簡単に奪えるのだろうか。」最近、加害者の身勝手な思いにより、関係のない人の命が奪われてしまうニュースが多くなりました。ニュースを見るたびに心が痛みます。突然奪われた命。その被害にあわれた方も無念でしょうし、それ以上に、残された家族や周りの人の苦しみは想像を絶するものだと思います。さらには、親が自分の子供を虐待し、命を奪う事件もありました。亡くなった子供たちはどれだけ苦しく、つらい日々を送っていたことでしょう。誰かが気づいてあげられたら、彼らの命は救うことが出来たのかもしれない。命は誰かに奪われるものではありません。命はこれからの未来を変えていく力を持つ、大切な宝物です。

また、時には大切な命が自然災害によって奪われることもあります。私の母は大学生の時に阪神淡路大震災に遭いました。母の住んでいた町でも家やビルが倒壊し、火災がひどく、一日中サイレンが鳴り響いていたそうです。母はその時から地震に対しての備えや命の守り方を考えるようになりました。そして、私も小さな頃から命の大切さについて教わってきました。阪神淡路大震災から二十年がたった一月十七日。小学五年生の時、私は節目として、神戸を訪れ、追悼式典に参加しました。太陽がまだ出ていない朝、絆や思いやりの心を伝える竹灯籠に火を灯し、亡くなった方々に祈りをささげました。私は、一度に失われた命の尊さを肌で感じながら一つ一つの竹灯籠に火を灯しました。周りから聞こえるのは、「あの時も寒かったなあ」「大変だったね」などの言葉。時を超えてもなお、人々の変わらぬ思い、そして、命の重みを感じた瞬間でした。

一人一人の大切な命。小さく、儂いものなのに、時には何にも負けない強さを感じられます。命を簡単に捨てないで！その命はあなただけの命ではありません。どんなに苦しいことがあっても生きている限り、解決する方法があるはず。命は目に見えませんが、命があるからこそ、楽しみや苦しみを感ずられます。

「あなたが生きている今日は、誰かが生きてたくても生きられなかつ

た明日」という言葉を聞いたことがあります。何気ないことですが、今私たちが生きていることについて考え直してみると、ありがたみを感じることができません。心に手を当てて！今の世の中だからこそ、もう一度、命について考えてみるべきです。これから私たちはたくさんの壁にぶつかることもあるでしょう。しかし、その壁を乗り越えるからこそ、生きている本当の素晴らしさに気づくのではないのでしょうか。世界でたった一つの命。神様からのプレゼントです。これからも命を大切にし、一日一日を無駄にせず、精一杯生きていこうと思います。そしていつか、「僕の生き方が一番だ！」と胸を張って言えるような人生を創り、歩んでいきたいです。





## 奨励賞

## 私たちの柴山潟

加賀市立片山津中学校 三年 矢鋪 莉音瑚

私はつい最近まで自分が住んでいる地域の環境を特に気にしていませんでした。でも、柴山潟クリーンレイクに参加して私の環境に対する意識は変わりました。二年生の時にも参加し、二度目の柴山潟クリーンレイクでしたが、その時よりゴミの量は多かったと思います。そこにはいつも登下校の時に源平橋から観るきれいな景色とはかけ離れたものがありました。何かみてはいけないものをみてしまったような気分になり、おどろきで眠気が一気にさめました。特に、ペットボトルや缶などの身近なものが多かったです。去年きれいにしたはずなのにどうしてこんなに汚れてしまったんだろう。そんな事を感じている内に清掃が始まりました。軍手をし、ゴミ袋を握りしめ、ゼッケンを着て柴山潟のすぐそばまで行きました。私達の仕事は、あすなる会の人達が引き上げたゴミを分別してゴミ袋に入れ、ゴミ置き場に持っていく事でした。そこで一番に出てきたのは「くさい」という言葉でした。山積みになったたくさんのゴミは異臭を放っていました。しかし、そんな異臭を放たせてしまったのは私達人間という事に気が付きました。本当なら柴山潟に流れるはずのないものを流してしまったのは、間違いなく人間です。なんだかそう考えると胸が苦しくなりました。そんなゴミを分別しながら私はあすなる会の人達を見ていました。あすなる会の人達は柴山潟に腰ぐらいまでつかり、箱にゴミを入れて私達にわたしていました。私ならあの汚れた水につかるのは多分できません。しかし、あすなる会の人達はみんなで声をかけ合ったり、笑顔だったりして、とても明るい雰囲気でした。それはきつと、あすなる会の皆さん一人ひとりに「柴山潟をきれいにしたい」「この自然を守りたい」という強い意志があったからだと思います。そんなあすなる会の皆さんは私にとってヒーローの様にみえ、かつこよく思えました。私も皆さんの思いを受け止めて、もつともつとがんばろう。そう思い、わたされたゴミを友達や先生と精一杯ゴミ袋に詰め、運びました。気付いたら作業を始めてから一時間がたち、休憩の時間に入りました。私は友達ともらったペットボトルのお茶を飲んでいま

した。自分達がそうじた所をみるとゴミは最初みた時の三分の一ぐらいになっていました。その分ゴミ置き場には何十袋ものゴミ袋がありました。自分達のことまでのがんばりを見て、とても嬉しくなりました。そして、自分が持っていたペットボトルを見て、これをこの柴山潟に捨ててしまうのは簡単かもしれないけど、それをくり返した時、捨ててしまったゴミを拾うにはたくさんさんの労力や協力が必要なんだな。そう考えさせられました。そして残りの時間も一生懸命そうじしようと思えました。残りのゴミはほとんど小さなゴミや木の枝などでした。それらをトンダグや手で袋に詰め、全てのゴミが柴山潟から出されました。私は、最後まで友達や先生と協力してやりとげた達成感でいっぱいになりました。

この体験を通して、私達がしないといけないことをみつけました。それは、自分が住む地域に感謝し、守る努力をすることです。そのために、地域の環境を知っておく事も大切だと思います。そして、一人ひとりがゴミを減らす工夫をしたり、環境に対する意識を持ったりすることだと思えます。これらを日本中の人達、世界中の人達ができれば、地球はより良くなり、人間だけでなく、他の動物や植物も生きやすくなるはずです。柴山潟は以前、もつともつと汚れていたそうです。それを町の人達のたくさんさんの努力やアイディアによって今日のような姿になりました。その気持ちを私は受け継いでいかななくてはなりません。私は今回みつけた事を忘れずに、地域の人達と力を合わせて、環境を守っていききたいです。







「障がい者というレッテル」を貼られながら生きる人の気持ちを、あなたは考えたことがありますか？

私の母には障がいがあります。母に障がいがあるということを知ったのは、私が小学校六年生の時でした。そのことを初めて打ち明けたとき、私の手をぎゅつと握りしめながら、「ごめんね、ごめんね。」と、何度も繰り返す母の姿を、私は今でもはっきりと覚えています。

私が幼い頃のことでした。母はちよつとしたことが原因で怒りが芽生え、ふと我にかえると泣き出していることがありました。そんなとき、私はどうすればいいかわからず戸惑い、不安になることがありました。けれど、母は、私がいやなことがあつて泣いていると、優しく温かい言葉でなくさめてくれました。そんなとき、それまでに感じた戸惑いや不安はすっかり消え、母の優しさが私を包みこんでくれました。

だからでしょうか。母に障がいがあると知っても、悲しみや怒りといった感情は、何一つ私の心に湧いてきませんでした。

母はよく「他人からどう思われているか」ということを気にかけていました。私や弟に後遺症がないか、自分のせいで、私たちが学校でいやな思いをしているのではないかと、とても心配していました。母は、障がいから気持ちが悪くなる状態になり、それが理由で、なりた職業にもつげなかつたそうです。だからこそ、私たちには、自分のように悔しい人生を歩んでほしくない、母はただ、その一心だったのでしよう。

テレビを見てみると、「障がい者だから」、「障がい者の子どもだから」という理由で差別する人々の映像が流れます。「どうして私だけこんな思いをしなければならないのだろう……。」そんな思いが、画面越しにひしひしと伝わってきます。

私はそんな場面を目の当たりにすると、本当に心が痛みます。テレビの中だけでなく、私の周囲にも、障がいのある人を差別したり、健常者より低く見たりする人がまだまだ多くいます。

けれど、どうでしょう。隣の人、クラスメイト、職場の人……みんな顔も体も心も性格も、そっくり一緒でしょうか。そう、ひとりひとり「ちがい」を持っているのです。

私は、母を、障がい者として見たことはありません。母は、私のたった一人の母なのです。一人の女性なのです。そして、人間なのです。そう思っているからこそ、私は、胸を張って学校に登校できるのです。そして、今、ここで胸を張って母の話ができるのです。私は、もう二度と、母のように「障がい者というレッテル」を貼られて生きる人を見たくはありません。母は、今、力強く生きようとしています。

だから、障がいがあるとかないかとということに、私は、とらわれたくはありません。どんな人にも、母のように強く生きていく一人の人間として、接していきたいと思っています。そして、社会全体が「障がい」という隔たりを越えて、人との「ちがい」を認め合っていけるようになってほしいと強く願っています。

そして、こんなにも大切なことを気づかせてくれた私の母に、誇りを持ち、感謝したいと思っています。





私にとって家族とは、いつも私を支えてくれる大切な人たちです。私はソフトボール部に所属していました。全能大会の一週間前、足にけがをしました。後輩たちから千羽鶴をもらい、「一緒に頑張るぞ。」と決意した矢先のことでした。三年生最後の夏ということもあり、病院で

「来週の試合は無理ですね。」

そう言われたとき、悔しくてたまりませんでした。「嘘やろ。せつかくみんな頑張ってきたんに。まだ続けたいがんに。」病院でギブスをはめてもらっているときずっとそう思っていました。

そんな時、声をかけてくれたのが母でした。

「試合出られんでも、応援するとかできることあるやろ。あとちょっと頑張りまっし。」

車の中でずっと黙っていた私にそう声をかけてくれました。私は、「ありがとう。」と思いつつもうなずくことしかできませんでした。

あの言葉があったから、何もかも吹っかれて応援できたのだと思います。もし、あの言葉がなかったら。ずっと悔しい思いをしたまま心の底から応援できていなかったと思います。

病院から帰った日の夜、母だけでなく家族みんなが温かい声をかけてくれました。祖父なんて

「気のせいや。すぐ治る。」

と笑いながら冗談を言っていました。私がいつも暗かったり辛そうだったるとき、必ず一言何か言ってくれます。そのたびに「私って家族に支えられとるげんな。」と思います。

私の家族は比較的笑顔が絶えません。でも、そうだったのは、それぞれが辛い思いを乗り越えたからです。

私が小さい頃、両親が離婚し「父」という存在を失いました。今まで身近にいた人がいなくなるといふ環境の変化についていけず泣くことが多かったです。そのたびに母は

「千冬、ごめんね。本当ごめん。」

何度も何度も辛そうな顔で謝りました。そのことを思い出すと胸が痛みます。

それから、祖父母や伯母と暮らすようになりました。みんな優しく笑顔で迎えてくれたことを今でも覚えています。ただ、一緒に暮らしている今まで気にしていなかったことが、急にイライラのきつかけになるのです。実際にそれが原因で母と伯母は口げんかをしました。そのときの母と伯母はなんともいえない顔をしていました。

今思うと、家族それぞれの思いをみんなの思いに合わせるといふ葛藤を重ねてきたからみんな笑顔で今を過ごせるのだと思います。家族といえど、嫌なところが見えてきてけんかをすることもあります。でもそのつど、腹を割って話をして仲直りしています。それを繰り返して今の私の家族ができているんだと思います。

今までのことを、振り返ってみると「私の家族って強い。」と思います。一般的に言う「幸せ」には当てはまらないのかもしれませんが。いつもそばにいてくれる母。声をかけてくれる祖母。わがままを聞いてくれる祖父。みんなを笑わせてくれる伯母。みんなそれぞれ違う強さを持っています。そんなみんなが集まって笑い合っただけで、その中に入っただけで一緒に過ごせるということは私にとってとても幸せなことです。

家族が私を支えてくれているなかで、一つ気づいたことがあります。それは自分一人の力ではできないことが多いということです。そのできないことに挑戦するために家族はいつも背中を押してくれていました。何事にも家族が勇気をくれたから頑張ることができたのだと思います。

次は私が、温かい声かけをして家族みんなの背中を押していきたいです。





「私は幸せ者」

あなたはどんなときにそう思いますか？ある人は「おいしいものを食べているとき」、ある人は「ゲームをしているとき」、ある人は「たくさん笑ったとき」、人それぞれ幸せの形というものは全く違うものだと思います。私達にとっての一番の幸せというものは一体何なのでしょうか？

ある朝、いつも通り朝食を食べながらテレビに目をやると、あるニュースが飛び込んできました。西日本に連日の豪雨が甚大な被害をもたらし、多くの人が亡くなったのです。次々に被害者へのインタビューの映像が流れました。「大切な家族を失った。自分もつとみんなに声をかけていれば……。自分が生きていることが罪のように思えてくる。」その言葉を聞き、次のニュースに切り換わった後も私は声を出せずにいました。

このように家族を失い、苦しい思い、辛い思いをしている人が日本に限らず世界にもたくさんいるのです。もう七年も前の出来事となった東日本大震災の被害にあった人達も今でもあの日を思い出して苦しみ、大切な人を失った痛みを抱えています。

このニュースを聞いて、私は今ここにある幸せに気づきました。帰る家があること。「ただいま」と言うこと「おかえり」と言うこと。帰る家があること。私の帰りを待っていてくれること。家に帰ると夕食が準備されていて、そこには私の座る席があること。いつも通りの朝がくること。言い尽くせないほどの幸せが私を守り、支え、育ててくれたのです。そんなことに今まで気づかなかったことに、私は自分が恥ずかしくなりました。

私は今までたくさんの人達に幸せを与えてもらいました。ソフトボール部の試合で先輩の足を引っ張り、厳しい言葉をかけられたときも、一年生の頃からずっと指導していただいた先生が「お前はよく頑張った」と何度も何度も言ってくれました。その言葉を聞いて私は涙が止まりませんでした。一番辛いときに一番うれしい言葉をくれ

る人がいる。「それだけで頑張れる。それだけで前に進む勇気が出る。」そう思いました。ピッチャーとしてのプレッシャーで胸が押しつぶされそうで、いつもビクビクしていた私。失敗をする度に今までやってきたことが全部ムダだったように思えてきました。しかし、そんないろいろな気持ちが入り混じり、張りつめていた心を先生のその言葉が溶かしてくれました。今までの頑張りを認めてもらった、「自分は頑張ったって思っているんだ。」私はたった一言だけで幸せを与えることができるのとき学びました。

私は先生に、友達に、近所の人に、仲間に、そして家族に幸せを与えてもらってばかりです。その幸せの形というものは様々です。「言葉」「笑顔」「当たり前の日々」「ピッチャーの私を勇気づけてくれる仲間のプレー」他にもたくさんあります。私は人を幸せにする人になりたいです。人を幸せにするということは簡単なことではありません。でも、こんな私でも与えられる幸せはきつとあると思います。私なりの幸せを今まで与えてもらった分、返していきたいです。

私達にとっての一番の幸せというものは一体何なのでしょう？私が一番の幸せとは家族や友達など、大切な人が自分の近くにいて、だと思えます。そんなこと当たり前だと言う人もいます。しかし、その当たり前が幸せなのではないのでしょうか。当たり前のように明日がきて、家族がいて、友達がいて、ご飯が食べられることが幸せなことだと私は思います。

「私は幸せ者」

あなたはどんなときにそう思いますか？ある人は「おいしいものを食べているとき」、ある人は「ゲームをしているとき」、ある人は「たくさん笑ったとき」私は毎日そう思っています。







世の中には虹色のバラという物があるらしい。私は画像でしか見たことは無いが、すばらしくキレイな花だ。このバラに出会ったのは、私がたまたま、美術部の活動で描く絵のネタを探している時だった。私の見ていたパソコンの画面に、まるで生命があたえられたかのように、その虹色のバラはあらわれた。衝撃を受けた。クリーム色がかった白いバラの中心に鮮やかな七色に彩られた虹色のバラが五本それが花束になってキレイな紙とビニールに包まれている。それを見たとき、「私はこれが描きたい。」そう強く思った。ただ絵のネタが決まった後、テーマがまったく決まっていなことに気付き、下調べをする事にした。それでパソコン画面に張り付いていると、実はあのバラ、人工的に作られていたという事が分かった。正確には、無色のバラに色水を吸わせた物だった。それはそうだろう。虹色のバラが、自然界に自生しているワケがない。少し、がっかりした。あんなに美しかった虹色のバラが人工的な物であったと分かると、少し複雑な気分になった。もう一度、…もう一度、あのバラを見る。やっぱり美しい。この気持ちだけは変わらない。例えばこのバラが人工的に作られた物であったとしても、私はこれを美しいと思う。人間は色々な物に手を加えて来た。植物、動物、地形。

パツと思ひ浮かぶだけでこれだけある。実際、私達の生活のほとんどが人が手を加えた物で成り立っている。やりすぎは良くない。とは言え人が手を加える事自体は悪い事では無いと私は思う。また生物が生きてゆく過程では進化が伴う。その進化の中で自分達がより豊かになるために周りを変革していくのは当たり前だ。あのバラを見る前まではこの様な事は全く考えられなかった。あのバラを知らなければ私が見えている世界は今よりずっと狭かった。何だか自分の視野がいつきぐぐっと広がったようでもすがすがしい気分になった。美しい、と一言で言っても色々ある。美しいの定義だって人それぞれだ。例えば自然界に自生している木々や花々を美しいと感じる人もいれば、ボディビルダーの様な人工的な筋肉に美を感じる人もいる。私は

そういった自分の感性で好きだと思える物を好きだと言える人はとてもすばらしいと思う。その一方で、だからこそ偏見というのは生まれしてしまう。私が美しいと感じたあのバラだって他人から見れば趣味の悪い花にしか見えないかもしれない。しかし、だからこそ、一度その目で見てほしい。あなたの目にどう映るかは分からない。だが自分が否定や拒絶をした物に対して偏見を持ったままにしておくのは良くないと思う。世の中にはたくさん美しいが眠っている。どんな物でもいい。その美しいを見つけられれば自分は今よりもっと色々な視点から物を見れるようになる。さらに、その美しいは自分が見つけた美しいなのだから自分だけの物の見方が出来るようになる。そしてそれが、偏見や周りの意見に流されず、自分を主張し合える世界へのかけ橋になる。これからの時代、自分で何かを決めたり、自分だけの考えを持てるかは何よりも必要になってくると思う。誰かの言いなりになって行動したり、機械的に何かをこなしていくだけではとてもつとまらない事だらけの世の中になっていく。だからこそ美しいを知ろう。そして、そこから何かを学び取ろう。そうすればきっと、それはあなたにたくさん力をくれるはずだ。





皆さんは、誰かの言葉によって、自分の心が救われたことがありますか。悲しいときや落ち込んでいるときに、周りの人がかけてくれる言葉には、トクベツな力がある。私は、ある出来事から、そう気づかされました。

私は、弓道部に所属しています。昨年、顧問の先生に、「女子の部長に選ばれたよ。」と告げられたとき、とても嬉しくて、皆が私を信頼してくれているのだと思うと誇らしく、チームのために頑張ろうと心に決めました。

しかし、いざ部長としての務めを果たそうとしても、なかなかうまくいきませんでした。副部長や男子の部長・副部長たちと、部活をより良くするための話し合いやコミュニケーションを十分取ることができず、協力して仕事をしているようには思いませんでした。さらに、私達がしつかり連携できていないからか、部内の雰囲気も緩く、一人一人の気持ちに温度差があり、チームとして同じ気持ちで練習に励む様子が見られませんでした。私は部長として不甲斐なさを感じ、とても悲しく、暗い気持ちで部活動をする日が続きました。

ある日、私は、母に思いを打ちあけました。皆が集中できるように声かけをしたり、効果的な練習になるようにメニューを組んだり頑張っているつもりなのに、皆が納得できるような行動になっていないこと、先生にも話を聞いてもらったけれど、心の一部が、まだもやもやしていること……。母は、穏やかに私の話を聞いた後、私の目を見て、にっこり笑ってこう言ったのです。

「なるようになるさ。」

母のこの言葉は、的を射た矢のように私の心にぐっと突き刺さり、「なんだ。そうだったのか」と、体の力がふっと抜けたのを感じました。私は、これまで部長として完璧にしようと、「焦り」や「不安」をずっと抱いていたから、何事もうまくいかなかったのだと、この時初めて気づいたのです。私の辛い気持ちを察して母がかけてくれたこの言葉には「頑張っていることならば自然と結果はついてくる。のんびり行こう。」というメッセージが込められているのではないかと思えたのです。

インドの政治指導者であったガンディーは、こう述べています。

「速度を上げるばかりが、人生ではない。」

当時、インドはイギリスからの支配を受けており、そんな状況から脱出するために、「非暴力・不服従」を提唱して、独立運動を指揮したガンディー。そんな偉大なことを成し遂げた彼だからこそ、何でも焦って先を急ぐことだけがよいわけではないということを知ったのでしょう。私の心に響いた言葉「なるようになるさ」もそれと似たような意味だと思えます。この言葉にもガンディーの言葉にも「結果は後からついてくるのだから、落ち着いて行動しよう」と言われているような気がするのには指導者としてのガンディーと部長としての私の立場が重なったからでしょうか。

始めに述べた、言葉に込められたトクベツな力というのは、人生がより良くなるように、これまでの古い考えを捨てるきっかけを与えてくれるものではないでしょうか。私は、母の言葉のおかげで、暗いトネルの中にいたような気持ちから、明るく前向きな気持ちへと切り替えることができました。そして、いつも焦ったり、心が不安定になったりするのはなく、結果がやってくるまで待つという姿勢で、冷静に行動するようになりました。

言葉は、人との関わりの中で、何らかの力を与えてくれるものです。誰かが言った言葉や、何かに書いて残した言葉の中には、人に感銘を与え、「名言」と言われる言葉も数多くあるかもしれません。しかし、そんな名言ではなく、ほんの小さな言葉でも、受け取る人の気持ちに寄り添うことで、大きな力を発揮するのではないのでしょうか。目に見える形が無いものだからこそ、その言葉を発する人の思いがますますに伝わると思うのです。私は、特別に飾った言葉でなくても、周りの辛い思いを抱えている人や落ち込んでいる人の立場になり、支えてあげられるような言葉をかけてあげたいです。私がそうであったように、その言葉が、誰かの気持ちを良い方向へと変えるきっかけになることを願って。



大変素晴らしい主張をしてくれた十六名の皆さん、ありがとうございます。どの主張も、興味を持ってしっかりと聞かせていただきました。

主張の中にもありましたが、すでに社会はグローバル化、情報化が進み、今日、その変化が予想をはるかに超えた加速度で進んでおります。そのような状況の中で、答えが見い出せない、または、答えが一つではない課題や従来から大切なこととされてきたが十分にできていない課題があります。これらの課題は、経験や知識が豊かな大人が知恵を出し合っても、なかなか解決することができないものがあります。

では、どうしたらいいのでしょうか。その一つとして、中学生であるみなさんの鋭い感覚で、純粋に「気づき」、純粋に「考え」、純粋に「行動」しようとする主張が大変貴重なものであり、これらの課題を解決するための可能性を秘めているのではないのでしょうか。

皆さんは、この県大会に至るまでに、自分の心に残ったこと、感じたことを、他にしっかりと伝えるために、話しの展開や表現の仕方を工夫するとともに、聞く人の心に響くよう、何度も繰り返し練習をしてきたことと思います。そのため、どの発表も中学生らしくさわやかな語り口調の中に、その人らしさが表れ、思いが明確に、しかも豊かに表現されていました。これは、中学生の時代にしかできない、まさに「少年の主張」であります。また、皆さん自身もお互いの主張を聞き、大いに共感できたのではないかと思います。

今後、皆さんそれぞれの主張を振り返り、さらに深め、高い志を持って、それぞれの夢や希望の実現に向けて歩まれることを期待しています。

本日は、貴重な発表を聞かせていただき、ありがとうございます。この大会で発表されたみなさん、ご支援いただいた先生方やご家族のみなさん、さらには、この大会の開催にご尽力いただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。





# 平成30年度 少年の主張石川県大会概要

## 1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

## 2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部  
独立行政法人国立青少年教育振興機構

## 3 後 援

石川県市町教育委員会連合会 石川県小中学校長会  
石川県PTA連合会 石川県少年団体協議会  
明るい社会づくり運動いしかわ 石川県青少年育成アドバイザー協会  
石川県BBS連盟

## 4 日 時

平成30年9月1日（土）午後1時30分～

## 5 会 場

石川県青少年総合研修センター（金沢市常盤町212-1 TEL076-252-0666）

## 6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

## 7 発表内容（日本語で発表すること）

- （1）社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
- （2）家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
- （3）テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や提言など。

以上のうち、日頃考えていることや感じていることについて、自由な発想で飾り気ない自分自身の言葉でまとめたもの。

## 8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞） 1名  
優 秀 賞（石川県教育委員会賞） 2名  
奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞） 13名

## 9 その他

- （1）発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を越えた人々の意識を啓発するために、健民運動推進本部のホームページにも掲載する。
- （2）最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が11月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

## 県大会審査基準

### 1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

### 2 採点上の観点

#### (1) 論旨・内容について

- ア 少年らしく新鮮で意欲的な主張であるか
- イ 主張の内容が明確で、論旨が一貫しているか
- ウ 主張の内容が共感と感動を与えるか

#### (2) 表現力について

- ア 聞きやすいか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があるか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えるか

#### (3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であるか

### 3 時間超過の場合の減点

各発表者の持時間を5分とし、持時間を超過した場合はその時間の長さに応じて減点をする。(5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。)

## 審 査 委 員

(1) 審査委員長 堂 坂 雅 光 (石川県市町教育委員会連合会 副会長)

(2) 審査委員 下 出 博 明 (石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長)

輪 瀬 薫 (石川県PTA連合会 副会長)

牧 野 哲 栄 (石川県少年団体協議会 副会長)

高 田 浩 (石川県小中学校長会 理事)

嶋 耕 二 (石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事)

## 地区大会概要

(1) 加賀地区大会（加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町）

「第37回 加賀地区中学生意見発表大会」

主催：加賀地区市町教育委員会

共催：石川県健民運動推進本部

日時：平成30年7月28日（土）13：30～

会場：能美市根上総合文化会館

審査員：向出 章（小松教育事務所長）

石黒 和彦（加南地区教育委員会連絡協議会長）

谷口 徹（能美市教育長）

坂東 隆（能美市学校教育研究会長）

野田美由紀（小松教育事務所国語指導主事）

発表者（19名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
園児から学んだこと	川北町立川北中学校	3	松本 莉知花
自分の道	能美市立辰口中学校	2	大杉 咲嘉
今しか聴けない話	加賀市立山中中学校	2	新家 彩桃
世の中のしくみとその捉え方	加賀市立錦城中学校	3	秋友 啓志
私の夢	能美市立根上中学校	2	荒木 春衣
私たちの柴山湯	加賀市立片山津中学校	3	矢鋪 莉音瑚
日々のあたりまえ	川北町立川北中学校	2	正村 逢愛
今の中学生について思うこと	小松市立丸内中学校	3	柿田 虎ノ介
国際交流は一つの「ピース」	能美市立寺井中学校	3	田中 大夢
真の関わり方とは	能美市立辰口中学校	3	森 成亜
児童虐待	加賀市立橋立中学校	3	田出 姫慧
私にとっての異文化理解とは	小松市立国府中学校	3	山口 陽向
お母さん、ありがとう	小松市立南部中学校	3	角 桃華
「笑顔」を共有するために	加賀市立片山津中学校	3	西岡 咲希
おじいちゃんの笑顔	小松市立御幸中学校	3	有本 朱環
少しでもはやく	能美市立辰口中学校	3	南 沙弥香
「コミュニケーション能力」とは	加賀市立錦城中学校	3	久保出 篤信
真の国際協力とは	小松市立中海中学校	3	多保田 真依
私の安宅—未来へ—	小松市立安宅中学校	3	酒井 遥菜



(2) 石川中央地区大会 (かほく市、白山市、野々市市、河北郡)

「第28回 (平成30年度) 少年の主張石川中央地区大会」

主催 石川県 石川県健民運動推進本部

共催 白山市教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会

日時 平成30年8月4日 (土) 13:30～

会場 白山市民交流センター

審査委員 松井 毅 (白山市教育委員会 教育長)

永井 隆和 (石川県河北郡市校長会 津幡町立津幡中学校教頭)

木村 俊夫 (白山市PTA連合会 運営幹事)

清水絵里奈 (石川県教育委員会金沢教育事務所 指導主事)

宮崎 禮子 (石川県青少年育成アドバイザー協会 会長)

発表者 (20名)

タイトル	中学校名	学年	氏名
神様からのプレゼント	野々市市立布水中学校	3	間口 桜之介
私を変えてくれた言葉	白山市立北辰中学校	3	永山 彩月
人はなぜ勉強するのか	白山市立松任中学校	3	山本 葵
一人で戦う強さ	かほく市立河北台中学校	3	坂部 時悠
意志を貫くか人にゆずるか	かほく市立高松中学校	3	竹田 有里
心と言葉で創る未来	かほく市立宇ノ気中学校	2	宮下 紗依
前進	白山市立光野中学校	3	中川 結子
友であり、ライバル	野々市市立布水中学校	3	新田 紗千
「今」を生きる	白山市立松任中学校	3	楠 真悠子
我以外皆、師なり	かほく市立高松中学校	2	北口 祐風
高齢化社会について あなたは何を考えますか	野々市市立野々市中学校	3	森田 開成
正しい団体行動の在り方	白山市立笠間中学校	3	山本 凜音
私たちができること	白山市立笠間中学校	3	宮下 千佳
あいさつは人と人との架け橋	白山市立鶴来中学校	2	林 雅樹
大丈夫？	内灘町立内灘中学校	3	森川 日捺
介護は家族とのつながり	内灘町立内灘中学校	3	矢花 みこと
視点を変える	かほく市立河北台中学校	3	酒井 奨吾
人は見た目に比例しない	白山市立美川中学校	3	伊藤 菜望
母の存在	津幡町立津幡南中学校	3	森澤 朱捺
ふるさと	白山市立鳥越中学校	3	山本 亜美

(3) 金沢市地区大会（金沢市）

第71回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主催 金沢市教育委員会 金沢市中学校文化連盟弁論部

日時 平成30年8月18日（土）13:00～

会場 金沢市教育プラザ富樫

審査員 二見 和男 NHKキャスター

市内中学校国語科担当教諭

発表者（24名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
周りからの支えに気づく	金沢市立長田中学校	3	村山 舜
自分を信じて	金沢市立金石中学校	3	岡部 桃杏
父の生き方から学んだこと	金沢市立野田中学校	3	山村 真結子
前向きに物事を考える	金沢市立額中学校	3	藤田 遥
集団の中で必要となる人	金沢市立城南中学校	3	横地 音和
未来の平和のために	金沢市立泉中学校	3	宮田 果乃
予測は未来を変える	金沢市立浅野川中学校	3	杉森 咲椰
趣味をもつことの大切さ	金沢市立高岡中学校	3	尾上 遥
人と人とをつなぐ伝統	金沢市立清泉中学校	3	中谷 楓子
一人一人の関心が伝統を守る	金沢市立紫錦台中学校	3	濱村 康介
「足」	金沢市立高尾台中学校	3	草野 裕太郎
「後悔」と向き合うには	金沢市立緑中学校	3	巻田 唯華
“Do anything as you can!”	金沢大学附属中学校	3	杉原 史緒梨
「可哀想」の一步先へ	金沢市立犀生中学校	3	粟森 咲
小さな言葉の大きな力	県立金沢錦丘中学校	3	黒田 咲陽
私は幸せ者	金沢市立兼六中学校	3	山本 花実
自ら進んで	金沢市立西南部中学校	3	増村 莉子
本当の優しさとは	金沢市立北鳴中学校	3	新出 奈凡
幸せが溢れたら	金沢市立港中学校	3	門 心乃花
徳を積む	金沢市立鳴和中学校	3	坂野 里紗
「役に立つ」の意味	金沢市立医王山中学校	3	丸山 結莉子
小さな出来事が大きな事件を引き起こす	金沢市立大徳中学校	3	能澤 水葵
メディアと共に生きること	金沢市立小将町中学校	3	山本 優耶
相手をよく見よう	金沢市立森本中学校	3	東 光翼

(4) 能登地区大会（七尾市、羽咋市、輪島市、珠洲市、羽咋郡、鹿島郡、鳳珠郡）

「第50回全能登私の主張発表大会」

主催 第50回全能登私の主張発表大会実行委員会、七尾市教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 平成30年8月19日（日） 9：00～

会場 七尾市文化ホール

審査委員 松浦 颯雄（全国高等学校文化連盟弁論部常任理事）

松中 基（石川県中能登教育事務所指導課長）

阿部 斉（七尾市教育委員会学校教育課長）

酒井 光博（七尾青年会議所理事長）

藤波 博之（七尾市小中学校校長会代表）

発表者（12名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
いただきますの意味	七尾市立七尾東部中学校	3	生長 陽仁
伝える	七尾市立能登香島中学校	3	濱田 花音
家族	七尾市立七尾中学校	3	宮本 千冬
メッセージを忘れない	七尾市立能登香島中学校	2	本田 知也
自分と相手	中能登町立中能登中学校	3	定塚 日菜子
壁	七尾市立七尾中学校	3	釜野 楓佳
音楽の力	七尾市立中島中学校	3	石島 凜々子
美を知り学ぶ	七尾市立七尾東部中学校	2	黒丸 文月
鳥と魚の声	七尾市立七尾中学校	2	長谷 さくら
かわいそうの裏	中能登町立中能登中学校	2	田中 童夢
道	中能登町立中能登中学校	3	千徳 きらり
料理は誰がするの？	七尾市立七尾中学校	1	銭元 勝大



## 人生を駆け抜ける

山形県 天童市立第三中学校 三年 岩淵 礼姫

「死にたい」、私はつぶやいた。期待に胸をふくらませていた中学校生活。しかし、そこにまっていたのは卑劣ないじめだった。指をさされ笑われた。トイレのドアをたたかれ罵声をあげせられた。すれ違うたびに馬鹿にされた。毎日苦しかった。悔しかった。もう死ぬしか逃げ場所がなかった。

そんな限界まで追い込まれた私は、ある日の朝爆発した。声が枯れるくらい泣きじゃくり、母に全てを打ち明けた。母は私の話を受け入れ、強く抱きしめてくれた。久しぶりに触れた人のぬくもりに、涙が止まらなかった。

その後、私はたくさんの人に助けられた。いじめをした人に直接注意してくれたクラスメイト、私のことを一番に考え、守ってくれた両親、陰ながら支えてくださった保護者の方々、相談に乗っていただいたり見守ってくれたりした先生方。その人たちのおかげで、「私は独りじゃない、心を閉ざさず自分を表現していいんだ。」ということに気づかされた。そして、私は一歩前に踏み出すことができた。本当に感謝してもきれない。

いじめを受けていた頃は、人に心を開けず、友達なんか一人もいなかった。でも、三年生になった今では、心を開けるようになり、親友と呼べるまでの大切な友達もできた。自分の存在が疎ましく、毎日通うのが苦痛だった学校も、今では、安心できる居場所となった。学校が楽しくて仕方がない。私は今、とても幸せだ。

いじめの経験は私を成長させてくれた。自分が変わるためには誰かからの助けを待つだけではなく、自ら一歩を踏み出さなければならぬこと、自分を偽らず正直に表現すること、そして、一番大切なことは私自身が周りの人を思いやること。私はいじめの経験から大切なことを学ぶことができた。

いじめをする理由は様々あると思う。「社交的じゃない」「容姿がみんなと違う」「一部分がみんなより劣っている」。でも、それは当たり前のことではないのだろうか。

金子みすゞさんの詩に、「みんな違ってみんないい」という言葉がある。それぞれが別々で、でもそれに優劣はなく、すばらしいのだ、という意味である。みんなが同じ顔、同じ容姿、同じ性格では社会は成り立たない。だからこそ、互いを認め合いながら生きていかなければならない。それぞれに個性があるから社会が成り立っているのだ。

私は、いじめを見ている人、いじめをしている人、いじめをされている人、それぞれに伝えたいことがある。まず、いじめを見ている人。今、少しでも助けたいという気持ちがあるなら、勇気を出して、いじめられている人に声をかけてあげてほしい。いじめられている人は「私の味方は誰もいない」という孤独感でいっぱいだと思う。声をかけてあげるだけでも心が楽になるはずだから。そして、決していじめる側の人間にならないでほしい。

次に、いじめをしている人。いじめは立派な犯罪だ。それでも、まだ、あなたは人を傷つけますか。自分のやっていることが人として本当に正しいかどうか、考え直してほしい。あなたのその一言が、あなたのその行動が、相手の命を奪うかもしれないということに気づいてほしい。

最後にいじめをされている人。今苦しくて悔しくて、もうこんな人生捨ててしまいたい、そう思っているかもしれない。私もそうだった。でも、死んで何になる。あなたが死んでしまったら、どれだけたくさんの方が悲しむか考えてほしい。あなたのたった一つの尊い命を捨てないでほしい。

「生きていて良かった」そう思える日が必ずくるから、全力で生きて。逃げていいんだよ。人生は自分の努力次第でどうにでもなるから、今は自分の命を大切にしてほしい。

私も、この経験から学んだことを活かし、たくさんの人に支えられ、助けられた自分のたった一つの命を大切にし、自分は自分らしく幸せになるために、しっかりと私の人生を駆け抜けていきます。



毎月第3日曜日は「家庭の日」です  
家族とのふれあいを大切にしましょう

---

## 石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地  
石川県県民文化スポーツ部県民交流課内

TEL 076-225-1365 FAX 076-225-1363

ホームページ [健民運動](#) [検索](#)

メール [kouryu@pref.ishikawa.lg.jp](mailto:kouryu@pref.ishikawa.lg.jp)

---

この冊子は再生紙を使用しています